

京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書（終了）

1. 研究課題

古典解釈の東アジア的展開——宗教文献を中心課題として

The development of the East Asian exegetical tradition, with special reference to religious texts

2. 研究代表者氏名

藤井淳

Fujii Jun

3. 研究期間

2013年04月 - 2016年03月（3年度目）

4. 研究目的

本研究は、中国を中心とする漢字文化圏の宗教文献と関連の諸事象に関する古典解釈の東アジア的展開の諸相を、他の諸地域における展開と対比的に検討しながら研究するものである。東アジアの古典が成立後、長い歴史の中でいかに継承、解釈され、変容を遂げたかを深く知るには、質量ともに豊富で且つ研究蓄積のある仏教の歴史を検討するのが有効である。例えば中世中国の仏教では、ある語句の意味を注釈する際、中国伝統の訓詁学を一部基にしながら、同音の漢字や意味の共通する漢字に置き換えて語義を展開することによってしばしば自らの理解に引きつけた思想を展開した。長い間に同一の語や概念が全く別様に変異した場合もある。従来近代的研究ではこうした解釈は時に誤解・曲解として軽んじられましたが、実際は東アジア的思考になじむものとして今も大きな影響をもつ。本研究は、漢字文化圏の古典解釈の展開を通時的に探求すると共に、漢字を思考や表現の基盤とする東アジア文化圏の特性をも広く探究する。

This project explores the historical development of East Asian exegetical tradition(s) by carefully comparing translations and interpretations of religious texts produced in the East Asian cultural sphere with those produced in other regions. In exploring the transmission, interpretation, and transformation of the East Asian classics over time, the history of Buddhism provides a particularly effective avenue of inquiry, because Buddhist textual materials are such a rich resource, both in terms of quality and quantity. They have, as a result, inspired a long history of productive research. In the case of medieval China, for example, when exegetes commented on the meanings of terms, they

often based their interpretations on the orthodox Chinese exegetical tradition, which sometimes led to the replacement of specific characters with either homophonous or (near-)synonymous ones. This led to an evolution in the interpretation of the original terms, whose connotations and denotations were transformed by these borrowings and substitutions. This research project aims to offer both a diachronic investigation of the exegetical approaches taken to the classics in the East Asian cultural sphere, and, an exploration of the idiosyncratic modes of thought and expression that have arisen in East Asian cultures due to their mode of literary expression: namely, Chinese characters.

6. 研究成果の概要

毎年8回程度の報告を3年継続し、各回の内容をオンラインで一般公開してきた。各報告の概要のより詳細については下記ウェブサイトを見て頂きたい。

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~kanjishukyo/home.html>

主に中国の仏教を中心とする班員が多いため、各回の報告内容も仏教文献と関わるものが多かったが、それだけに関わらず、仏教の図像解釈、仏寺の考古学的分析、儒教文献、道教文献、中国民間宗教、前近代日本の宗教事情等に関する報告も行われ、毎回の報告には、主たる報告者に加えて、同じ領域からの別の研究者をコメンテーターとし、また全く別の領域からもう一人別のコメンテーターを立て、毎回、三人が担当にあたった。また、欠席班員への情報伝達と研究班後の補足資料のため、ウェブ上での情報公開を班員限定で行った。最終報告論文集の刊行に向けて班長が準備をすすめている。

8. 共同研究会に関連した公表実績

公開講座

「仏教では「心」をどうとらえてきたか——漱石「こころ」発表百年の今、古典に描かれた「心」を再考する」

(京都大学人文科学研究所「人文研アカデミー」、2014年11月8日 研究班ホームページ)

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究報告としてこれまで毎回の研究班内容をウェブで公開してきた。冊子体による論文集の刊行を班長が行っている。